

テレビ番組の文字情報における文字種の選択

—番組のジャンルと語用論的要素に注目して—

増地ひとみ

【キーワード】 テロップ 文字種 語用論的要素 非標準的な表記 カタカナ

1. 研究の背景と目的

現代日本語の文字言語においては、主に4種類の文字種を使用する。漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字である。これらの文字種の使い分けに関しては、「標準的」と見なされる大まかな基準が存在し、社会的に共有されている。しかし実際には、この大まかな基準を外れた「非標準的な表記」が多数観察される。

4種類のいずれを用いることも可能であるにもかかわらず1種類が選択される時、その背後には何らかの要因が働いている。文字種全般が選択される際の要因を洗い出し、体系的に整理することで、現代日本語における表記行動の現状を把握することが可能になる。本稿は、そうした要因を洗い出す試みの一環である。

文字言語もコミュニケーションの手段である以上、場面に応じた表記者（以下、「表記主体」）の意識が介入し、文字種を選択するにあたっての大きな要因になると考えられる。つまり、語用論的な要素も要因として考慮する必要があるのである。しかし、従来の先行研究にはその視点が欠けていた。

本稿ではテレビ番組におけるテロップ等の文字情報を題材として取り上げ、文字種が選択され使い分けられる要因の一つを、語用論的な要素との関連において明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と本稿の位置づけ

「非標準的なカタカナ表記」¹がなされる要因は、先行研究によって多くが明らかにされてきた。現代日本語（1945年以降）を対象としたものは斎賀秀夫（1955）が端緒であり、その研究史は、土屋信一（1977）、野村雅昭（1981）、佐竹秀雄（1980aほか）の世代と柴田由紀子（1993）以降の世代とに大別できる。特に、2000年代に入ってから多数の研究がなされてきた。

先行研究において明らかになった「非標準的なカタカナ表記がなされる要因」は、「規範意識」「形式」「表現効果」「文脈」の4種類に分類できる（増地ひとみ 2012）。しかしながら、先行研究においては、表記主体が「なぜ規範を重視したの

¹ 「非標準的なカタカナ表記」は則松智子・堀尾香代子（2006）、「非標準的な表記」は佐竹秀雄（1989）において使用された術語である。

か」「なぜそのような表現効果を狙ったのか」といった語用論的な要素、つまり「場面」「意識」や「場面・意識と文字種の関係」まで踏み込んで考察の対象とし、論じた研究はない。なお、カタカナに限定せず「文字種の選択」という観点で見ると、佐竹秀雄(1980b)が「敬意の効果」を狙って漢字表記形を選ぶという表記主体の意識に着目している。しかし、「敬意の効果」ではカタカナ表記を選択する意識までは説明できない。

テレビ番組のテロップに関する研究は、多分野において数多くなされている。インターネットが普及した現在においても、テレビは訴求力の高いメディアであり²、言語生活への影響力が大きい。テロップは「ここ数年で番組演出上なくてはならない“必須項目”となってきた」（植村昌人 2004）とされ、その役割としては「情報を二重に与える」（柴田実 2007）ことなどが指摘されている。また、内山和也（2002）は振り仮名とテロップの共通性を述べる。

任意に、いわば自由に情報を付加できるテロップは、番組制作者の意図を伝えるために活用しやすい媒体であると言える。そして、番組制作者の意図、つまり表記主体の意識は、使用される文字種にも現れるはずである。しかしながら、テロップで使用される文字種の使い分けに焦点を当てた研究はなされていない。

以上を踏まえ、本稿は、テレビ番組におけるテロップ等の文字情報を対象とし、文字種が選択される要因の一つとして語用論的な要素が働いていることを明らかにするものである。

3. 研究の対象および方法

具体的な調査対象と方法、依拠する概念と考察の観点は、以下のとおりである。

- ・調査対象：2011年1月21日（金）から4月2日（土）の間に放映されたテレビ番組 29 本におけるテロップおよび画面内の文字（スタジオで使用されるボード等）³（番組詳細は本稿末尾 別表A）

※ 番組は視聴率の高さを基準に選定し⁴、番組ジャンル「報道」「教育・教養・実用」「スポーツ」「その他の娯楽番組」を対象とした。

※ 以上の 29 本に加え、その他のテレビ番組から随時個別に収集した文字情報（以下、「個別収集分」）も対象とした。

² 「新聞離れ」は全世代共通の傾向として見られる一方、テレビ視聴時間は若年層では減少、シニア層で増加、全体では微減という傾向を示す。（NHK放送文化研究所 2011）

³ テレビ番組で表示される文字情報には、画面上に後から付与されるテロップと、画面内（番組内）で使用されるボード等に記載された文字情報とがある。いずれも同じ番組制作者が一定の方針のもと作成するものであるため、本稿ではテロップと画面内の文字情報の両者を合わせて扱う。

⁴ ㈱ビデオリサーチの視聴率データ「週間高世帯視聴率番組 10」Vol.4-8（対象：2011年1月17日～2月20日）から視聴率の平均を求め、視聴率の高い番組を選定した。

<http://www.videor.co.jp/data/ratedata/backnum/2011/index.htm>

今回調査対象とするこれらの文字情報を、以下「テロップ」と言う。

- ・分析・考察の方法：対象となった番組を録画し、画面に表示される全文字情報を、表示される表記のとおり 1 行単位で Excel に入力した。次に、カタカナ表記語を抽出し、『かたりぐさ』⁵を用いて品詞情報と語種情報を付与した。集計の結果得られたデータは、次のとおりである。

◇対象番組数：「報道」10 本、「教育・教養・実用」11 本、「スポーツ」2 本、
「その他の娯楽番組」6 本 計 29 本で、総放映時間は 1,448 分

◇文字情報の総行数：15,906 行

◇カタカナ表記語のべ語数は 4,941 語。うち非外来語系のカタカナ表記語が 1,318 語。

※「非外来語系のカタカナ表記語」は、「外来語以外がカタカナ表記された語」と、「外来語以外がカタカナ表記された語を一部含む混種語」の総称とする。「非外来語系のカタカナ表記」は堀江紫野（2001）による術語である。

以上の作業によって得られた文字情報のデータを基に、番組のジャンルと使用文字種の関係を考察する。また、非標準的なカタカナ表記語を切り口にして、文字種選択の要因を探る。

- ・依拠する概念と考察の観点：

本稿では、語用論的な要素である「コンテキスト」と「意識」の観点から文字種選択の要因を考察する。

「コンテキスト」は「コミュニケーションが成立する場面、状況」と定義する。井出祥子（2006）の表現を借りるならば、コンテキストは「発話を取り巻く要素の総合」であり、「話し手、聞き手、登場人物の人間関係、場のあらたまりの程度、話のジャンルなどに関するもの」などのほか、『何を言うか・言わないか』『いつ言うか』などに関する情報もコンテキストに含まれる。「話の場において何を言うのが適切かを支配している」要素全てがコンテキストなのである（p.28）。つまり、本稿におけるテレビ番組のジャンルの違いは、コンテキストの違いであると見なすことができる。特に本稿においては、「コンテキストに応じた表記主体の意識」という観点が重要である。

表記主体の「意識」に関しては、「社会的規範」と「表記主体のストラテジー」の 2 つの側面に注目する⁶。表記主体はこの双方を調整しつつ言語行動（表記行

⁵ 独立行政法人国立国語研究所 研究開発部門 第一領域によって作成された、言語研究、自然言語処理用の語種情報データ。インターネット上に無償で公開されている。

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php> 『かたりぐさ』に掲載がない語については、類似の語を参照し、筆者の判断で語種情報を付与した。

⁶ 三牧陽子（2002）では、言語使用における「社会的規範」と「個人のストラテジー」の 2 側面に注目してポライトネス研究がなされるべきであると述べられている。本稿では、表記主体の意識の 2 側面を表すのに、三牧にならい「社会的規範」という術語を用

動)を行っているとの前提に立ち、論を進める。

4. 調査結果

4.1 字種比率から見たテレビ番組のテロップの特徴

本節では、文字言語としてのテロップの特徴を、字種比率の観点から概観する。

まず番組ジャンル別に見ると、報道番組のテロップでは漢字の比率(別表A ジャンル「報道」)が非常に高く、朝日新聞社説⁷の漢字の比率に近くなっている。ひらがなは社説に比べて20%程度少なく、その分カタカナの比率が高い。概して報道番組、教育・教養・実用番組では漢字の比率が高めであり、その他の娯楽番組、つまりバラエティ番組ではカタカナの比率が高めである。バラエティ番組のテロップは発話を文字化したものが多いため、カタカナが多用されるのであろう。この字種比率は、テロップにも文体があり、報道番組においては書き言葉に近く、バラエティにおいては話し言葉に近いことを示している。

次に、「別の日に放送された同番組」におけるテロップの字種比率を比較する。「情報7days ニュースキャスター」の3月19日および4月2日放送分のテロップを比較したところ、東日本大震災直後の3月19日と、約3週間後の4月2日とでは、字種比率に変化が見られた。4月2日放送分ではテロップ自体215行増加し、カタカナ表記語と非外来語系のカタカナ表記語も各々約2倍に増加した。それに伴い、字種比率ではひらがなは4.8%減、カタカナは4.4%増となった。番組内容を比較したところ、この違いは番組構成および扱われる話題の違いから生じていた。すなわち、3月19日放送分にはスポーツ関連ニュースやバラエティの要素を含むコーナーが全く含まれておらず、話題も、番組の最初から最後まで全てが大震災関連のものであった。先に述べたとおり、バラエティ番組においてはカタカナの字種比率が高く、非外来語系のカタカナ表記語も多数出現する。スポーツコーナーにおいても、スポーツの名称や選手名、競技の開催地など、外来語や外国の人名・地名にカタカナが多用される。3月19日放送分には、そのバラエティの要素を含むコーナーとスポーツ関連ニュースが番組内容に含まれないことによって、カタカナ表記語が減少し、カタカナの字種比率も低下したのである。

以上のように、番組のジャンルによってテロップで使用される字種の比率が大きく異なる。また、同じ番組であっても、放映時点での社会的な状況によって番組の構成が変わり、それが使用される字種の比率にも反映する。「番組のジャンル」や「社会的な状況」は、すなわちコンテキストである。コンテキストと文字種の比率には密接な関係があることがわかる。

いる。また、「個人のストラテジー」の代わりに「表記主体のストラテジー」という術語を用いる。

⁷ 石井久雄(2001)の調査によれば、朝日新聞社説(2000年発行分)の字種比率は、漢字(43.90%)、ひらがな(51.22%)、カタカナ(4.41%)である。

4.2 テレビ番組のテロップにおける非標準的なカタカナ表記

4.2.1 番組のジャンルと非標準的なカタカナ表記語

番組ジャンルごとに非外来語系のカタカナ表記語、つまり非標準的なカタカナ表記語を品詞別に集計すると、表1のとおりである。

【表1】番組ジャンル別・品詞別 非外来語系のカタカナ表記語(のべ)

		報道		教育・教養・実用		スポーツ		その他の娯楽番組	
品詞		語数	比率	語数	比率	語数	比率	語数	比率
名詞	一般	13	11.8%	104	25.7%	6	10.3%	175	23.5%
	固有名詞	51	46.4%	75	18.6%	35	60.3%	187	25.1%
	動植物(性別含む)	30	27.3%	149	36.9%	2	3.4%	112	15.0%
	助数詞	5	4.5%	5	1.2%	1	1.7%	0	0.0%
	代名詞	2	1.8%	9	2.2%	2	3.4%	64	8.6%
	形容動詞語幹	2	1.8%	13	3.2%	1	1.7%	53	7.1%
	サ変接続	0	0.0%	4	1.0%	2	3.4%	18	2.4%
	略語	0	0.0%	0	0.0%	2	3.4%	0	0.0%
	接尾辞(人名)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%
動詞		0	0.0%	3	0.7%	1	1.7%	21	2.8%
形容詞		0	0.0%	2	0.5%	2	3.4%	32	4.3%
副詞		7	6.4%	33	8.2%	4	6.9%	53	7.1%
感動詞		0	0.0%	2	0.5%	0	0.0%	27	3.6%
連体詞		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%
その他		0	0.0%	5	1.2%	0	0.0%	2	0.3%
合計		110		404		58		746	1318

※「報道」「教育・教養・実用」番組内のスポーツコーナーは、「スポーツ」に含めた。

※固有名詞の例には「トヨタ」等の社名、「イチロー」等の人名、商品名などがある。

これらは命名の時点である意図のもと選択された非標準的な表記であり、原則的に番組のジャンルによって文字種が変化するものではない。「フクシマ」などの地名も、番組のジャンル以外の要因が優勢に働いてカタカナ表記になると考えられる。固有名詞に非標準的な表記が選択される要因は別に論じられるべきであり、本稿では扱わない。

※「形容動詞語幹」「サ変接続」が名詞の下位区分となっているのは、『かたりぐさ』の品詞区分に従っているためである。

固有名詞以外の項目では、番組ジャンルごとに、非標準的なカタカナ表記がなされる語には一定の傾向が見られる。特に顕著であるのは、「報道」では名詞と副詞にのみ現れる点、「その他の娯楽番組」では動詞・形容詞・副詞・感動詞のほか、名詞の中でも代名詞、形容動詞語幹に多く現れる点である。「教育・教養・実用」で副詞に多い点、「スポーツ」では広い範囲で満遍なく出現している点も注目される。一般名詞は、「教育・教養・実用」と「その他の娯楽番組」で多数現れている。

4.2.2 非標準的なカタカナ表記 — 事例と、先行研究に見る選択要因

本節では、表1に該当する語の中から具体例を挙げて、テロップにおいて非標

準的なカタカナ表記が選択された要因を考察する。

- ・以下、【】内は、その文字種を使用して表記されていることを示す。
- ・表内の記号の意味は、次のとおりである。×：表外字、▽：表外音訓、※：2010年11月30日内閣告示「常用漢字表」で追加されたもの

【表2】「報道」における名詞（一般）

		標準的表記	語種	出現文字列(テロップ)	種類
1	イス	※椅子／×倚子	漢語	イスが少なくなっている	発話
2	ウソ	×嘘／うそ	和語	ウソですか？	発話
3	カギ	※鍵／かぎ	和語	成長のカギ握る	
4	カネ	金／かね	和語	政治とカネに対して	
5	カネ	金／かね	和語	対象は“カネ持ち”高齢者—	
6	ヒマ	暇・×隙／ひま	和語	内容については十分議論するヒマがなくて	発話
7	メド	目▽処／目途／めど	和語	メド立たず	

【表3】「報道」における名詞(代名詞)

		標準的表記	語種	出現文字列(テロップ)	種類
	ワシ	▽私／×儂／わし	和語	ワシは寂しくない	発話

表2の例がカタカナ表記された理由を、先行研究で指摘されている要因に照らして概観する。まず1に関しては、この「イス」は物体としてのイスではなく「職」を指したものである。したがって、漢字本来の字義からの距離感を保つ働きを持たせるためにカタカナ表記された例と解釈できる。3番の【カギ】も同じ用法であり、「比喩的な表現に用いられるカタカナ表記」と言い換えることもできる。

しかし、2番【ウソ】、4・5番【カネ】、6番【ヒマ】、7番【メド】は漢字本来の字義どおりの意味で使用されており、今述べた用法には該当しない。考えられる要因として、【ウソ】は表外字であるために漢字を避け、ひらがなかカタカナかを選ぶ段階で、埋没を避ける、あるいは目立たせる意図のもとカタカナ表記が始まった可能性が高い。【カネ】【ヒマ】に関しては、それぞれ「キン」「イトマ」と誤読されるおそれがあるという理由から、カタカナ表記され始めた可能性がまず考えられる。【政治とカネ】については、マス・メディアでよく使用される表現であるが、「政治絡みの裏の金、汚い金である」等のニュアンスを付加しようとしたものであると解釈できる。従来とは少々異なる意味やニュアンスで語を使用していることを、表明しているのである。5番の【カネ持ち】も同様であろう。

【メド】というカタカナ表記も、現代のテロップにおいて頻繁に観察される。同時に、【めど】も頻繁に観察される。【目途】は表内字であるにもかかわらず、今回調査対象となったテロップでは一度も出現しなかった。一方、【メド】は9件、【めど】は8件見られた。【目途】【目処】では読みにくいため仮名にしようとしたと判断し、そこからひらがなかカタカナに枝分かれするのである。テロップでは「め

ど」の前後にひらがなが使われる場合も多く、【めど】だと埋没してしまう。しかし、それでも【めど】が規範的であると判断し【めど】を採用する、あるいはひらがな文字列への埋没を避けて【メド】を採用する、という流れで【めど】【メド】のいずれかが選択されているのであろう。

【メド】に限らず、テロップは短時間で消えてしまうため、読みやすさが考慮される。概して、形が単純で文字列内で埋没しにくく、語としての識別性にすぐれるカタカナが選ばれるのは理にかなっていると言える。表3【ワシ】も、発話の話し言葉的な特徴を示すとともに、読みやすさが考慮されての表記であろう。

続いて、「報道」以外の番組における非標準的なカタカナ表記を概観する。表1の「教育・教養・実用」「その他の娯楽番組」では、「名詞（一般）」で非標準的なカタカナ表記語が多い。この要因として、まず、漢字が表外字である点が考えられる。【サビ】（錆）【ゴマ】（胡麻）【クジ】（鯨）などが実例として挙げられる。同時に、文字列への埋没を回避することもできる。ほかの要因としては、言葉の深刻性、真剣味、強烈すぎるイメージを緩和する効果も考えられる。例としては、【ガン】（癌）【コブ】（瘤）【フン】（糞）などが挙げられる。ただし、「鋏」「蓋」「箒」など言葉の深刻性や強烈すぎるイメージとは関係のない語も同様にカタカナ表記となっている。これらがカタカナ表記されたのは表外字であることがいちばんの要因であり、仮名を選ぶ段階で、埋没を避けるためにひらがなではなくカタカナを選択した可能性が高い。

以上の本節における考察は全て先行研究の成果に基づくものであり、一つひとつの語のレベルで非標準的なカタカナ表記がなされた要因を考えていくと、たいていは先行研究で指摘されたいずれかの要因、あるいは複数の要因に当てはまる。そして、語によってその要因はさまざまである。

4.2.3 非標準的なカタカナ表記 — 語用論的要素との関連から

ところが、テロップにおいて実際に観察される非標準的なカタカナ表記には、先行研究で明らかにされてきた要因のみでは十分に説明ができない例が存在する。

表4の例は、埋没を避けるだけが目的であればカタカナを選択する必要がある語を、一部抽出したものである。これらは全て、漢字、またはひらがなで表記しても、文字列に埋没することはない。表内字であれば漢字で書くことが可能であり、表外字であってもひらがなを選択することができる。また、1～14番は発話のテロップでもないため、話し言葉的な特徴を表そうとしてカタカナ表記が選択されたわけではない。

13～21番に関しては、確かに先行研究が指摘する要因でも説明が可能である。まず、13～18番は形容詞と形容動詞である。このような、感情や感覚、状態や性質、評価を表す語に非標準的なカタカナ表記が現れやすいことは先行研究で指摘されている。また、15～21番は発話のテロップであり、かつ19～

21番は代名詞であることから、先行研究の表現を借りるならば「ノリの良さ」を表したり、特別なニュアンスや語感を持たせたり、目立たせたりする意図が働いていると解釈可能である。

【表4】

		標準的表記	語種	出現文字列(テロップ)	番組	種類
1	ナゾ	※謎／なぞ	和語	街角ナゾ図鑑	その他	
2	ギモン	疑問	漢語	51分間の“ギモン”会見 専門家が徹底分析	その他	
3	ギモン	疑問	漢語	もう一度見たい！動物のギモンSP	その他	
4	モノマネ	物真▽似／ものまね	和語	モノマネ度	その他	
5	モノマネ	物真▽似／ものまね	和語	モノマネ芸人募金活動	その他	
6	モノ	物／もの	和語	カワウソと同じモノが大好物	その他	
7	モノ	物／もの	和語	1月の旬モノ	その他	
8	ヨダレ	×涎／よだれ	和語	ヨダレ必至のグルメワールド！ デパ地下	その他	
9	ハズレ	外れ／はずれ	和語	屈辱の4回ハズレ	その他	
10	オンナ	女／おんな	和語	男を操る強いオンナSP	その他	
11	カンドウ	感動	漢語	カンドウ、 スポーツ！	スポーツ	
12	ワケアリ	訳有り／訳あり／わけあり	和語	ワケアリ大家族6	その他	
13	イキ	粋	漢語	東京の船宿 イキな決断	その他	
14	キワドイ	際▽疾い／きわどい	和語	キワドイ質問に30分答え続けられ20万円	その他	
15	ウマイ	▽甘い・▽旨い・ ▽巧い／うまい	和語	ウマイ事せんかい！	その他	発話
16	スゴイ	×凄い／すごい	和語	スゴイ勝負してるよね！	その他	発話
17	キレイ	奇麗・綺麗	漢語	だって 君はキレイ	その他	発話
18	フツー	普通	漢語	フツウの家と同じ	その他	発話
19	ボク	僕	漢語	ボク熱く語りましたよ	その他	発話
20	ボク	僕	漢語	いま喋ってたでしょ！ボク	その他	発話
21	コレ	×此れ／これ	和語	ほとんど皆 コレ言うんです	その他	発話

では、なぜ13～21番のように、非標準的なカタカナ表記を用いて特別なニュアンスや語感を持たせたり、目立たせたりするのであろうか。また、1～12番のような例が出現するのであろうか。

ここで考慮しなければならないのが、語用論的な要素、つまりコンテキストとそれに応じた表記主体の意識である。表4は、1件が「スポーツ」、そのほかは全て「その他の娯楽番組」、いわゆるバラエティ番組からの例である。字種比率にも現れていたとおり、「報道」番組が規範的でかしまったコンテキストを持っているのに対し、バラエティ番組はカジュアルでくだけたコンテキストを持っている。

そして、表記主体、つまり番組制作者は、より多くの視聴者に番組を見てもらい、高視聴率を獲得することを目指して番組を制作している。その目的を達成するためには、「報道」番組は信頼性、バラエティ番組は楽しさを重視し、それに応

じた番組の空間を作り上げる必要がある。文字種の使い分けは、そのための手段の一つである。コンテキストに応じた表記主体の意識として、報道番組では「社会的規範」が、バラエティ番組では「表記主体のストラテジー」が優位に働くよう調整がなされていると言える。したがって、報道番組においては標準的な表記を中心に使用することで視聴者との適正な距離を保ち、バラエティ番組においては、特にカタカナによる非標準的な表記をテロップで多用することで明るく楽しい番組空間を作り上げ、視聴者との距離を縮めようと働きかけることになる。

例えば代名詞【僕・ボク】はどのジャンルの番組でもテロップになるが、本稿の調査対象においては、【ボク】は「報道」や「教育・教養・実用」に属する番組では一度も使用されず、【僕】のみであった。表4のような非標準的なカタカナ表記は、報道番組では現れにくいものである。特に動詞、形容詞、形容動詞、代名詞、感動詞にほとんど現れず、「その他の娯楽番組」と大きな差が出ているのは表1で確認したとおりである。

以上のように、コンテキスト、表記主体の意識、文字種は連動しており、この連動しているという捉え方が文字種の選択要因を考えるにあたって重要である。

なお、バラエティ番組におけるテロップの役割についてはいくつかの先行研究で言及されている。例えば設楽馨(2006)は、バラエティ番組におけるおしゃべりは「極めて個別的で状況依存度の高い発話」であり、視聴者はテロップから「おしゃべりの生じた場がどのような状況なのか、今、ここがどういった場を形成しているのか、という手がかりを得ることになる」(p.49)と述べる。また、宇野常寛(2008)は、バラエティ番組がテロップを多用する理由を、『『この発言のどこで笑えばいいのか』という空気＝表現の空間』が視聴者たちに伝わりにくくなっており、「だからテロップを入れ、空気を指定してあげなければならない」(p.48)ためであると説明している。両者ともにテロップの役割は「場」つまり「空気を指定」することだと述べており、この「空気」「場」こそがコンテキストである。バラエティ番組においては、テロップが「空気」あるいは「場」、つまりコンテキストを規定すると言える。この時に重要な役割を果たすのが文字種である。そして、バラエティ番組が持つコンテキストが、今度はテロップに使用する語や表記を規定していくことになる。循環が起きているのである。

言い換えれば、カジュアルでくださったコンテキストを持っているバラエティ番組であるからこそ、非標準的なカタカナ表記を多用することが許されている。現代日本語において、4種類の文字種とそれらによる表記は、各々が異なるイメー

8 蒲谷宏(2006)においては、待遇コミュニケーションにおける場面・意識・内容・形式の「連動」という捉え方の重要性が論じられている。

「場面」は本稿における「コンテキスト」と同義であり、「形式」は「文字種」を含む。「コンテキスト(場面)」「意識」「文字種(形式)」が互いに関連し合っただけで動いていることを表すのに、本稿でも蒲谷にしたがって「連動」という語を用いる。

ジを持っている。そのイメージは多様な条件のもとで生じるが⁹、カタカナ表記は外来語のイメージと結びついているため、外来語以外を表記するのにカタカナが使われた場合、つまり非標準的なカタカナ表記は、概して意外性や親しみやすさ、くだけた雰囲気などをもたらす。また、規範的な表記を逸脱して非標準的なカタカナ表記が使われた時点で、社会的規範よりも表記主体の戦略が優先されていることを視聴者は敏感に感じ取る。そこで、バラエティ番組においては、報道番組で非標準的な表記が使われにくい品詞の和語や漢語に非標準的なカタカナ表記が活用され、意外性や親しみやすさなどが付加され、さらに強固な「バラエティ番組のコンテキスト」が作り上げられる。例えば代名詞のカタカナ表記(【オレ】【コイツ】【アレ】【コチラ】等)をはじめ、形容動詞語幹と形容詞(【アホ】【ダメ】【ムダ】【テキトー】【イイ】【スゴイ】等)、動詞(【ズレる】【ダメす】【トぶ】【ハまる】【ハズレる】【ヤめる】等)¹⁰、その他感動詞などの例が見られる。

反対に、コンテキストから見てふさわしくないと判断された場合には、たとえ文字列に埋没したとしても標準的な表記が選ばれ、非標準的なカタカナ表記は現れない。これは特に報道番組に顕著な傾向であり、社会的規範をより重視したいという制作者の意図、つまり表記主体の意識に基づくものと解釈できる。

このように、報道番組においてもバラエティ番組においても、コンテキストとそれに連動した表記主体の意識が関わり、文字種選択にあたっての要因となっているのが明らかである。

5. まとめと今後の課題

本稿では、テレビ番組における文字情報の実例を題材として取り上げ、文字種が選択され、使い分けられる要因の一つを語用論の枠組みにおいて考察してきた。文字種の選択にあたっては、先行研究で明らかになってきた要因に加え、語用論的要素、すなわち「コンテキスト」やそれに応じた「表記主体の意識」も同時に作用しており、「文字種」と連動しているというのが本稿が提示する結論である。文字種の選択にあたっては、語用論的な要素が要因の一つとして確かに働いており、このように語用論的要素を考慮することで、文字種が選択される要因を重層的に、また実状に即して捉えることが可能になる。

本稿の課題として、用例が少ない点、用例の質に偏りがある点が挙げられる。今後、文字種の選択に関わる要因をさらに考察していくにあたり、本稿のデータ

⁹ 増地ひとみ (2012) pp.34・38

¹⁰ ここに例示した非標準的なカタカナ表記語は、バラエティ番組であるからこそ選択され、テロップに使用された語であると言える。つまり、コンテキストは語を選択する段階から表記主体に影響を及ぼしているのである。表記行動の全体像を考える上では、表記以前の語の選択段階をも考慮する必要があるが、本稿は表記の選択の段階に焦点を当てるものである。

をどう位置づけていくのかという点を含め、研究方法の検討が必要である。現代日本語における文字種の選択、ひいては表記行動の全体像を明らかにすることを目指し、さらに調査、分析と考察を進めていきたい。

【参考文献】

- 石井久雄 (2001) 「ひらがなの文法性・語彙性」『同志社大学留学生別科紀要』1 pp.3-16
- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』 大修館書店
- 植村昌人 (2004) 「特集1 テレビの字幕は誰のためのものか」『放送文化』5 pp.2-17 日本放送出版協会
- 内山和也 (2002) 「振り仮名表現の諸相」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部, 文化教育開発関連領域』51 pp.301-309
- 宇野常寛 (2008) 『ゼロ年代の想像力』 早川書房
- NHK放送文化研究所 (2011) 『国民生活時間調査報告書 2010 年』NHK放送文化研究所 (世論調査部)
- 蒲谷宏 (2006) 「「待遇コミュニケーション」における「場面」「意識」「内容」「形式」の連動について」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』19 pp.1-12
- 斎賀秀夫 (1955) 「総合雑誌の片かな語」『言語生活』46 pp.37-45
- 佐竹秀雄 (1980a) 「若者雑誌のことば一新・言文一致体」『言語生活』343 pp.46-52
- 佐竹秀雄 (1980b) 「表記行動のモデルと表記意識」『国研報告 67 電子計算機による国語研究X』pp.142-168
- 佐竹秀雄 (1989) 「若者の文章とカタカナ効果」『日本語学』8 (1) pp.60-67
- 設楽馨 (2006) 「テレビのトークコーナーを読むー同一の発話を伴わない文字テロップの実態」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』18 pp.37-61
- 柴田実 (2007) 「放送と漢字」『文字と社会』新「ことば」シリーズ 20 pp.34-42 国立国語研究所
- 柴田由紀子 (1993) 「文体形成から見たカタカナの役割」『花園大学国語論究』21 pp.22-34
- 土屋信一 (1977) 「現代新聞の片仮名表記」『電子計算機による国語研究Ⅷ 国研報告 59』pp.140-159
- 野村雅昭 (1981) 「週刊誌のカタカナ表記語」『馬淵和夫博士退官記念 国語学論集』pp.847-865 馬淵和夫博士退官記念国語学論集刊行会編／大修館書店
- 堀江紫野 (2001) 「カタカナ表記の研究ー非外来語系を中心に」『国文目白』40 pp.16-24
- 則松智子・堀尾香代子 (2006) 「若者雑誌における常用漢字のカタカナ表記化ー意味分析の観点から」『北九州市立大学文学部紀要』72 pp.19-32
- 増地ひとみ (2012) 『現代日本語における文字種の選択』2011 年度修士論文 早稲田大学文学研究科
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母話者間のボライトネス表示ー初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」『社会言語科学』5 巻 1 pp.56-74

一ますじ ひとみ 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程一

【別表A】 調査対象 テレビ番組一覧					文字情報	カタカナ表記語	全表記記号に対する字種ごとの割合					
ジャンル	番組名	放送局	放送日 (2011年)	長さ (分)	総行数	のべ	うち非 外来 語系	漢字	ひらがな	カタカナ	ローマ字	その他
1 報	ニュース・気象情報	NHK	3/6(日)	15	162	8	0	52.7%	38.5%	2.5%	1.0%	5.3%
2 報	NHK7時58ニュース	NHK	3/6(日)	2	19	0	0	70.9%	26.6%	0.0%	0.0%	2.5%
3 報	首都圏ニュース845	NHK	3/7(月)	15	162	29	2	57.7%	27.7%	6.7%	0.3%	7.6%
4 報	ニュースウオッチ9	NHK	3/7(月)	60	769	169	17	43.0%	38.5%	9.1%	1.4%	8.0%
5 報	NEWS23クロス	TBS	3/8(火)	52	598	171	26	43.5%	28.5%	11.7%	3.8%	12.5%
6 報	NEWS ZERO	日テレ	3/8(火)	64	720	174	15	42.7%	32.3%	10.3%	4.5%	10.2%
7 報	NHKニュース7	NHK	3/9(水)	30	443	74	11	49.4%	33.7%	6.8%	0.6%	9.5%
8 報	首都圏ニュース845	NHK	3/9(水)	15	180	45	9	44.8%	31.4%	11.3%	1.1%	11.4%
9 報	報道ステーション	テレ朝	3/9(水)	76	864	187	42	43.6%	32.4%	8.5%	3.1%	12.4%
10 報	LIVE2011 ニュースJAPAN	フジ	3/9(水)	23	292	88	18	36.7%	33.5%	12.6%	6.7%	10.5%
11 教	これが世界のスー パードクター 第14弾	TBS	3/22(火)	110	1228	281	61	35.6%	45.5%	9.0%	1.7%	8.2%
12 教	そうだったのか！池上 彰の学べるニュース	テレ朝	1/26(水)	54	565	154	11	36.8%	40.8%	10.5%	2.6%	9.3%
13 教	爆笑問題のニッポン の教養	NHK	2/1(火)	30	172	101	82	28.9%	48.2%	17.8%	1.3%	3.8%
14 教	サンデーモーニング	TBS	3/6(日)	114	863	370	27	45.5%	18.6%	18.0%	3.6%	14.3%
15 教	真相報道バンキ シャ！	日テレ	3/6(日)	55	913	216	37	44.2%	35.2%	9.1%	2.1%	9.4%
16 教	ダーウィンが来た！ 生きもの新伝説	NHK	3/6(日)	28	150	128	68	20.3%	15.7%	49.3%	5.2%	9.5%
17 教	Mr. サンデー	フジ	3/6(日)	75	546	134	21	38.7%	38.1%	8.9%	3.5%	10.8%
18 教	クローズアップ現代	NHK	3/9(水)	28	144	51	9	38.5%	37.3%	14.6%	3.6%	6.0%
19 教	ためしてガッテン	NHK	3/9(水)	43	459	124	40	32.5%	44.1%	10.4%	1.9%	11.1%
20 教	情報7daysニュース キャスター	TBS	3/19(土)	84	757	149	20	40.9%	37.3%	8.2%	4.8%	8.8%
21 教	情報7daysニュース キャスター	TBS	4/2(土)	84	972	294	44	39.4%	32.6%	12.7%	5.4%	9.9%
22 ス	すぽると！	フジ	3/9(水)	30	516	212	9	33.0%	24.1%	16.8%	14.1%	11.9%
23 ス	S・1	TBS	3/19(土)	58	595	166	5	41.8%	37.4%	9.5%	2.6%	8.7%
24 他	ぴったんこカン・カン	TBS	1/21(金)	58	417	132	24	28.3%	42.1%	11.9%	7.0%	10.7%
25 他	世界一受けたい授業	日テレ	1/22(土)	58	680	324	72	34.0%	39.3%	17.1%	1.8%	7.7%
26 他	行列のできる法律相 談所	日テレ	1/23(日)	54	982	265	120	34.7%	42.6%	10.1%	1.5%	11.1%
27 他	ペケボン	フジ	1/28(金)	57	583	275	184	35.8%	30.3%	19.0%	3.8%	11.1%
28 他	笑点	日テレ	3/6(日)	30	54	14	1	50.0%	18.6%	15.5%	6.2%	9.7%
29 他	ぶっすま	テレ朝	3/29(火)	46	1101	606	343	24.9%	41.0%	18.4%	3.9%	11.8%
	合計			1448	15906	4941	1318	40.3%	34.2%	12.6%	3.4%	9.4%

※ジャンル欄の「報」は「報道」、「教」は「教育・教養・実用」、「ス」は「スポーツ」、「他」は「その他の娯楽番組」を表す
※放送局欄の「NHK」は「NHK総合」、「日テレ」は「日本テレビ」、「フジ」は「フジテレビ」、「テレ朝」は「テレビ朝日」の略である

早稲田大学日本語学会会則

- 第1条 本会は早稲田大学日本語学会と称する。
- 第2条 本会の事務局は、早稲田大学内におく。
- 第3条 本会は、日本語の研究ならびに会員相互の親睦をはかることを目的とする。
- 第4条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
1、研究会および講演会の開催 2、機関誌の発行 3、その他
- 第5条 本会は、日本語の研究に関心をもつ早稲田大学の教員・校友・学生およびそれらの紹介者をもって会員とする。
- 第6条 本会には、次の役員をおく。
1、代表委員 1名 2、委員 若干名 3、会計監査 2名
- 第7条 本会は、本学会発展のために尽力した会員を「名誉会員」とすることができる。
- 第8条 役員は、総会において会員の中から選出する。
- 第9条 役員の任期は、1年とする。ただし重任を妨げない。
- 第10条 会員は所定の会費を納めなければならない。
- 第11条 本会は、会費・寄付金その他によって運営する。
- 第12条 本会は、年1回総会を開く。ただし、必要があれば代表委員が臨時総会を招集することができる。
- 第13条 本会の会計年度は、毎年6月1日に始まり、翌年5月31日に終わる。

〈2012年度 学会役員〉

代表委員 高梨信博

委 員 仁科 明（会計担当）、川口義一（編集担当）、
笹原宏之（庶務主任）、上野和昭、鈴木 豊、近藤尚子、
木村義之、永井悦子

会計監査 鈴木義昭、高松正毅

学生委員 澤崎 文(会計)、屠 潔群、齋藤美妃奈、李 婷、劉 璟

『早稲田日本語研究』投稿規程

1. 本文の字数・行数・段組について(1 ページあたり)
 - ①横書きの場合は、段組なし。1 行 36 字(明朝体・12 ポイント)、37 行。
 - ②縦書きの場合は、上下 2 段組。各段 1 行 28 字(明朝体・12 ポイント)、24 行。段間 3 字あけ。
2. 標題・氏名・注などの書き方
 - ①標題は、原則として明朝体 16 ポイントとし、第 1 ページの 1 行目中央に記す。副題については、文字の大きさなど任意(ただし縮小率に注意)。
 - ②氏名は、原則として明朝体 14 ポイントとし、標題・副題から 1 行あける。
 - ③キーワードは、【キーワード】と表示し、5 語程度。文字の大きさは 12 ポイント。
 - ④要旨は【要旨】と表示し、文字の大きさは 12 ポイント。キーワードから 1 行あける。ただし要旨の掲載は任意とする。
 - ⑤図表等は、文字・記号・数字が見やすくなるように作成する。査読の結果、修正を要求されることがある。
 - ⑥注・参考文献などは、明朝体 11 ポイントあるいは 12 ポイントとする。なお、注の位置は後注または脚注とする。参考文献には番号をふらないこと。
 - ⑦原稿末尾に、執筆者の氏名(仮名書き)と所属・役職(学生の場合は在学する学校・課程名など)を記すこと。前後に全角のハイフンを付け右寄せ(縦書きの場合は下寄せ)とする。
3. 注・参考文献などを含んだ全体を 12 ページ以内とする。13 ページ以上の場合は受け付けない。
4. プリントアウトする原稿は、A4 判の白紙に、余白を上 35mm、下および左右 30mm とって黒字印刷すること。そのまま版下として使用するので、訂正・汚れなどのない完全原稿を提出する(図版・表組の濃度・文字に注意。網掛けは用いないこと)。
5. 提出する原稿にはページを印字せずに、裏面に鉛筆で小書すること。
6. 原稿の返却には原則として応じない。
7. 「原稿受理日」を記載する場合には、発行の前年の 9 月 30 日とする。ただし、9 月 30 日以降加筆修正することにより、引用文献などの年月記載と不整合が生じる場合は、翌年 1 月 31 日までの任意の日付を「原稿受理日」として記載してよい。
8. 本文とは別に 800 字程度の要旨(査読審査用)を提出すること。
9. また本文・要旨とは別に、執筆者の氏名(仮名書きも)、住所(郵便番号)・電話番号・e-mail アドレス・所属(職名も。学生の場合は学校名、

課程・学年なども）・最終学歴・最近の研究業績などを記した書類を必ず添付すること。

10. 投稿締切は、毎年 9 月 30 日とする。投稿論文と要旨は、正本 1 部のほかにコピー 2 部を添えること。採否は委員会に一任されたい。
11. 採用の際には、論文 1 編について抜刷 20 部を進呈する。
12. 投稿論文の送付先：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14
早稲田大学大学院日本語教育研究科 川口義一研究室気付 早稲田大学日本語学会『早稲田日本語研究』編集担当（封筒には「早稲田日本語研究投稿論文在中」と朱書すること。）
13. 本誌に掲載された論文の著作権は早稲田大学日本語学会に帰属する。
14. 本誌に掲載された論文は、PDF化のうえ、早稲田大学図書館が運営する「早稲田大学リポジトリ」に保存し、無償でWeb上で公開する。ただし、著作者の申し出により、Web上での論文公開を行わないことができる。
15. ①著作者は、著作者自身が自ら、本誌に掲載された論文の全部または一部を著作権法で認められている一定の範囲内で利用する場合は、本学会の許諾を必要としない。
②著作者は、前項の利用を行う際には、本誌名および当該論文が掲載された号を明示しなければならない。
16. 本誌に掲載された論文が第三者の著作権およびその他の権利を侵害した場合は、その一切の責任を、著作者が負うものとする。

(2012年7月7日改訂)